開校20周年記念　ぎゃらりー わ　特別号　2013・10・9

阪神から東北へ…KSCの震災活動

福祉ボランティア　高まる期待

学長　今井鎮雄

1977年、まだ日本社会が経済成長や効率が優先し、物質的豊かさを追い求めていた頃、神戸市は「神戸市民の福祉をまもる条例」を制定し、市、事業者、市民が一体となって福祉の主体者となり、市民の福祉を推進しようと呼びかけました。

市民自らがボランティアとして福祉の担い手となり、まちづくりに参画できるようにと、神戸市は福祉ボランティア養成のためのカリキュラムと施設を備えることを考えました。こうして、1993年９月、「しあわせの村」の一角に神戸市シルバーカレジが開校しました。

95年２月、カレッジホールで救援物資の仕分け作業をする学生たち

そして1995年１月、阪神淡路大震災が起こり、シルバーカレッジは救援活動のためにキャンパスを提供すると、カレッジ生は進んで校舎を飛び出し、自ら被災地へ出かけて被災者に寄り添い、生きる勇気を取り戻す手伝いをしたのです。阪神大震災を機に、私たちは、人間の幸福とは単に金を儲けることでもモノを多く持つことでもないと学びました。

建学の精神あふれる活動

このときボランティア活動に従事した学生諸兄姉が中心となって、カレッジ卒業後の1997年、社会還元センターグループ〈わ〉が設立されました。シルバーカレッジの建学の精神「再び学んで他のために」のもと、メンバーは地域社会の中で、小学校での学習支援活動、三世代交流による文化の伝承活動、環境保全活動など幅広い活躍を続けられています。

2011年３月の東日本大震災のあと、グループ〈わ〉は被災地支援のための募金活動、また東北支援チームを結成して被災地へ赴かれるなど、1995年以降の神戸での震災ボランティアとしての経験を活かし、被災者に寄り添い、支えとなってくださいました。

カレッジ生のさらなる挑戦

「KSCの震災支援シンポジウム」は、その寄り添いの結実であり、まさしく神戸市シルバーカレッジの目指してきたことの集大成であり、カレッジにつらなる人々の誇りとするところでありましょう。

ドラッカーは『非営利組織の経営』の中で「世界の大きな変化の中で再び機能的な組織体制を世界が持つには百年はかかるだろう。この変化を新たな時代が機能するまで、時間を繋ぐ役割はボランティアが担うのである」と言います。

世界に先駆けて近未来に超高齢社会を迎える日本では、他者に寄り添う社会、人と人が互いに支え合う社会を築くために新たな福祉文化の構築が求められ、それを担う福祉ボランティアへの期待がますます高まっています。

「再び学んで 他のために」は、これからの社会では神戸市シルバーカレッジの建学精神を超え、より深く広い意味を持つことになるでしょう。シルバーカレッジ生、卒業生の一人ひとりがいま向き合っている福祉ニーズへの挑戦は、時代が抱える課題の解決への手がかりになるものであることを思い、グループ〈わ〉の皆様のさらなる活躍を期待するものです。

（10月9日の「震災支援シンポジウム」の学長挨拶から）

●「やあ生きていたんやね」阪神大震災を語る　2～4P　●東北支援チーム奮闘記　5～7P

発行　NPO法人グループ〈わ〉　神戸市北区しあわせの村　シルバーカレッジ内　TEL078-743-8101